

現存最古の大唐西域記寫本

高田時雄

厳しい残暑の残る八月の末、京都は堀川寺ノ内にある古刹興聖寺で大唐西域記の古寫本を見ることが出来た。これまでその存在だけは聞き知っていたが、不幸にして眼福を得る機会がなかった天下の至寶である。今回それが可能となったのは、本研究プログラムの落合教授のお勧めで、同寺所藏一切經の調査及び寫眞撮影に臨時参加を許されたからである。小文ではその折りの見聞を基礎として、若干の知見を書き記しておきたい¹。

興聖寺の大唐西域記は全十二卷完具しているが、すべてが同時代の寫本なのではない。後世の補寫を含んでいて、各卷のあいだにはかなり大きな年代の開きがある。そこで年代の分かる識語を列挙すると、以下のようになる。

第一卷 「延暦四年（785）七月書寫蓮慶」

第二卷 「仁安二年（1167）二月七日書了／求菩薩沙門信西」

第四卷 「仁安二年（1167）歳次丁亥二月五日／求菩薩沙門寛盛書」

第六卷 「嘉吉二年（1442）四月七日借筆於白蹈聖人令書藏内之闕者也」

このうち第六卷は卷首に「轉六」の千字文番號があり、また卷末には字音が附されているので、刊本の大藏經（おそらく思溪版）から寫したものであることが分かる。また第十二卷は各種の訓點や假名が施されているため、訓點資料として早くから國語學者による研究が行われてきており、識語こそないもののその書寫年代は承和十一年（844）以後、おそらくは天曆頃（947-956）のものと考えられている。というのは卷末に近い箇所（紙背）に承和十一年三月二十三日附けの中臣由多氣の出舉稻返納の解文が書かれているが、それは西域記の書寫の際、偶々用紙が足りなかったかなにかして、その解文の反故

¹便宜を供與された長門玄晃住職にお禮申し上げるとともに、興聖寺の經卷については、すでに詳細な『興聖寺一切經調査報告書』（京都府教育委員會、1997年）があることを附記しておきたい。

を再利用したものと見られるからである²。要するに第一巻と第十二巻が古く、わけても第一巻は群を抜いて古い寫本ということになる。もっとも第一巻の識語については本文とは別筆ということもあり疑いも存するようだが³、偶々調査に同行された古寫經の専門家である京都國立博物館の赤尾榮慶氏によれば、寫本の外見や字様の特徴は、この年代のものと考えて特におかしな点はないということであった。反対に、この識語の年代を否定しようとするれば、より具體的な根拠が必要であろう。ひとまず我々はその年代を認めておきたいと考える。

さてその第一巻は高さ約 27cm、幅 55cm の紙 16 枚を貼り繼いだ寫本で、天地及び毎行に界線が施されている。界高は 24.3cm、毎行の字数は 20 字から 25 字で一定しない。もと卷子本であったものを折帖に改裝してあるが、この第一巻は他の諸巻に比べて少し背が高くなっている。ちなみに紙背の解文の上下が缺けているのは、おそらく改裝時に切斷されたものと見られるが、そうすると本來の卷子の紙高はさらに大きかったということになる。こういった外見の特徴もこの第一巻が特別なものであることを感じさせる。

日本に現存する大唐西域記の古寫本は、これまで既知のものとして他に（一）京都國立博物館所藏康和四年（1102）書寫本（卷一のみ、守屋孝藏舊藏本）、（二）法隆寺に所藏される大治元年（1126）加點本（卷二と卷十二を缺く）⁴、（三）大谷大學所藏の大治本（卷二、即ち上記法隆寺本に缺けた部分に當たる。神田喜一郎舊藏）、（四）石山寺所藏の長寛元年（1163）移點本（卷一より卷八、卷九以下は刊本より寫したもの）、（五）醍醐三寶院所藏の建保二年（1214）書寫本（卷十一、卷十二のみ）、（六）京都大學人文科學研究所所藏の橘寺本（松本文三郎舊藏で、十二卷完具。）、（七）東京國立博物館所藏で紺紙金銀字のいわゆる中尊寺經（大正藏にいう松本初子所藏本）などがある。これらのテキストは（一）（二）を除き、多

² 吉澤義則「濁點源流考」『國語國文』6、7 號。後、『國語説鈴』（東京、立命館出版部、1931 年）に再録、その 289-290 頁。また吉田金彦「訓點拾遺五題」『訓點語と訓點資料』第 11 輯、475 頁；曾田文雄「興聖寺本大唐西域記卷第十二の朱點」同上、486-487 頁を参照。

³ 吉田金彦、上掲論文、474 頁。

⁴ 春日禮智「日本現存支那佛教史籍古鈔古刊本目録」（『日華佛教研究會年報』6、昭和 18 年 9 月）及び大谷大學東洋史學文學支那學研究室編「東洋學關係佛典目録」『大谷學報』29-1（1949）はこの寫本を「延暦四年（785）書寫、大治元年（1126）寫點了」とするが、おそらくこの本が出展された時の目録『第十回大藏會陳列目録』の記述を読み違えたことに歸因する誤りであり、實際に寫本に據ったものではないと思われる。

少の違いはあってもこれまで西域記テキストの校勘に利用されてきた⁵。さらに近年の調査によって利用可能になったものに名古屋大須の七寺本、大阪河内の金剛寺本（巻一、巻十を缺く）があり、落合教授のプロジェクトによって撮影された鮮明な画像を国際佛教學大学院大學で見ることが出来る。近年、唐代の標準的藏經テキストを忠實に保存するものとして日本の奈良平安朝書寫佛典の価値が大きく再評価されつつあるが、西域記についてもオリジナルのテキストを復元する上でこれらの古寫テキストがきわめて重要な役割を果たすものであることは言うまでもない。今や日本古寫經のテキストを全面的に利用する時期に來ているといえよう。その意味で一段と古い興聖寺本の意味は小さくないはずである。

ところで敦煌吐魯番寫本中にも西域記の殘卷が存在する。敦煌本としては S.2659Va（首缺、巻一の大部分）、P.3814（巻二の後半約三分の一）、S.958（巻三の巻首、十數行のみ）が知られている⁶。そのうち第一のものは同光二年（924）三月にインドへの求法の旅から歸った鄜州開元寺の僧智嚴がその旅のあいだ攜帶していた寫本である⁷。他の二種については書寫年代を知り得ないが、文字や寫本の外形的特徴から見て、早くても九世紀をさかのぼることはないように思われる。とすれば興聖寺の西域記第一巻は紛れもなく現存する最古の寫本ということが出来るのである。

筆者は、さっそく試みに大唐西域記第一巻について、興聖寺本を他の日本古寫本及び敦煌本と比較してみた。そして幾つかの重要な點において、高麗藏本をはじめとする大藏經諸本との際だった違いを見いだすことが出来た。しかもその違いはこれらの寫本間では著しい一致を示している。残念ながら

⁵近代の西域記校訂本の代表的なものとして以下の四種を挙げることができる。（一）『大唐西域記、同考異索引』、京都帝國大學文科大学叢書第壹、明治四十四年（1911）刊、（二）『大正新修大藏經』第五十一卷史傳部三所收本、1928 年刊、（三）『大唐西域記』章巽校點本、1977 年上海人民出版社刊、（四）季羨林等『大唐西域記校注』、1985 年中華書局刊。

⁶これらは向達『大唐西域記古本三種』（中華書局 1981 年刊）に収録されていて、簡単に見ることが出来る。吐魯番本は僅か十行ほどの小斷片で、巻七の部分であるが、破損が激しくテキストの校勘には役立たない。柳洪亮『『大唐西域記』傳入西域的年代及其有關問題』『新出吐魯番文書及其研究』（新疆人民出版社、1997 年刊）372-381 頁を参照。

⁷榮新江「敦煌文獻所見晚唐五代宋初的中印文化交往」『季羨林教授八十華誕紀年論文集』（江西人民出版社、1991 年刊）、（下）956-957 頁。なお P.2700bis（Recto）はこの寫本の更に前、第一巻の目錄部分に当たる斷片である。これまで言及がないので、この場を借りて補足しておく。

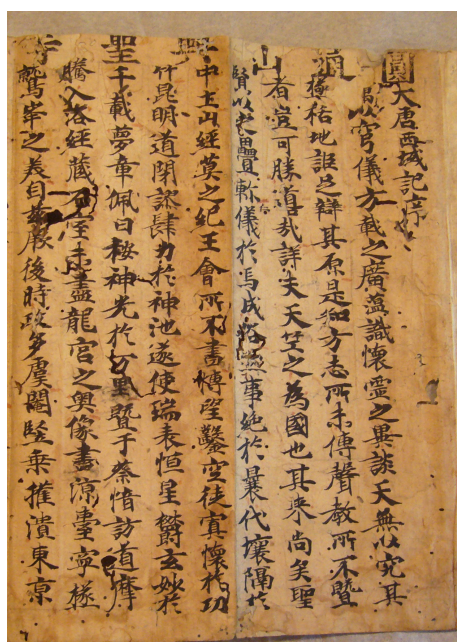


圖 1: 卷首

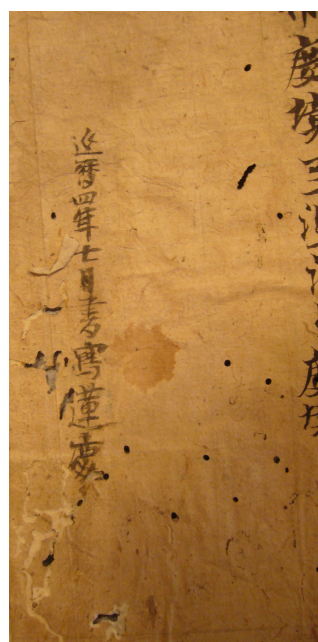


圖 2: 卷末識語

與えられた紙数の関係で、ここではそれらについて詳しく述べる事が出来ない。しかし西域記テキストの再構に興聖寺本をはじめとする古寫本の利用が缺かせないことは明白になったと思う。